

菅楯彦「金剛暮雲」とその時代

著者	米田 文孝
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	70
ページ	6-9
発行年	2015-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023842

菅楯彦「金剛暮雲」とその時代

米田文孝

1. はじめに

近代の大阪画壇を代表する日本画家のひとりで、没後50年展の開催をはじめ、近年再評価されつつある菅楯彦は多作で知られる。しかし、太平洋戦争で焼失したり所在不明であったりする作品も多く、その作品を全体的に把握・集成することは難しい。これには、祖父（蟠龍）・父（盛南）・叔父（泰民）・妻（美記子）たちの伝記・遺稿集『三葦一艸』が楯彦の厳密な校正や用紙不足もあり、1941年末に頓挫したことなど、同時代的な年譜類がないこともその確認を困難にしている要因であろう。

楯彦の作品は、作風の変遷から大きくその制作年代を類推できるが、本紙や共箱に干支を記した作品や、展示会図録・目録などの同時代資料で照合できる作品を除き、その断定は困難である。とくに、太平洋戦争前後における楯彦の画業は、史資料の制限も影響して把握が難しい。このような状況下、1942（昭和17）年11月27日（金）～29日（日）の3日間、大阪高島屋美術部で菅楯彦の小作品展が開催され、そこに出品・販売された作品（「金剛暮雲」）を1点確認できたので紹介する。

なお、楯彦の作品には、「萬歳」「中元踏歌」をはじめ、同名同工の作品が散見されることか



写真2 「金剛暮雲」の姓名印と関防印（原寸）

ら、その特定は必ずしも容易ではないが、今回紹介する「金剛暮雲」は作品の特徴や関連史料の比較などから、この小作品展に出品されたものであると推断できる。

2. 「金剛暮雲」について

まず、「金剛暮雲」をみておくと、横幅の本紙は紙本淡彩で51.8cm（縦）×60.5cm（横）、軸先は象牙様模造品である（写真1）。本紙上には、姓名印の朱文方印「菅楯彦印」（没五十年展図録印譜集姓名印No.31、1937年以降）と、関防印の白文方印「従善如流」（同図録印譜集関防印No.17、1939年以降）・白文方印「大哉業矣」（同図録印譜集関防印No.18、1932年以降）の落款がある（写真2）。姓名印と関防印の使用開始年代は、本作品の制作時期を1942年と措定することに矛盾を生じない。

楯彦は作品にしばしば詩や歌などの画讃を加えるが、本作品にも本紙の右側に、「南朝枯木鎖寒霏 五百春性（原漢詩では六百春秋）一夢非幾度問天天不答 金剛山下暮雲歸 録 溪琴翁詩」と記され、菊池海莊（溪琴）〔1799～1881年〕の漢詩「河内路上」を記している。また、左側には「余徘徊金剛山下 近五十年焉 今為加西之客 追想以難作此圖 至志不至筆如何 浪速御民楯彦」と、独自の書風でこの作品に込めた思いを吐露しており、詩画一致の境地を示している（写真3）。



写真1 「金剛暮雲」



写真3 「金剛暮雲」の本紙画讃（左）と箱書き（右）

つぎに、共箱(桐製)の外側には「金剛暮雲」、内側には「浪速御民楯彦」の墨書と白文方印の氏名印「楯彦」(没五十年展図録印譜集姓名印No.51、1923年以降)の落款があり、二重箱(桐製外箱)の蓋には「高島屋美術部」と印字された題簽に、「金剛慕情・個展作品」と外題が記されている。これらの共箱や外箱、楯彦の特徴的な書体による墨書作品名(箱書)などから、一体の拵えであることに違和感はない。

また、これとは別に大阪高島屋美術部で開催された菅楯彦の小品画展の目録がある(写真4)。この目録は、和紙一枚物の印刷物(38.5cm×19.0cm)で、20数点の作品名が記載されている。小品画展の開催にかかる挨拶文に続き、「秋夜談古」と題する紙本2尺2寸(約67cm)横の作品1点の次に「農村迎春」以下、紙本2尺(約60cm)横の作品名が7点続き、「金剛暮雲」はその6番目に掲載されている。その他、扇面小品1点、額面1点、半折(縦約136cm×幅約35cm)6点、小品数点が記載されるが、ここにある「金剛慕情」が本作品に該当する可能性がある。

さらに、「金剛慕情」の共箱内に添えられた本作品の白黒写真(縦10.8×横12.8cm)と、その裏面の墨書(昭和十七年十一月菅楯彦先生個人展観)・捺印(高島屋美術部)を勘案した場合、本作品がこの目録の「金剛暮雲」と一致するものと判断してよいであろう(写真5)。

3. 菅楯彦1942年の画業

上記の結果に加え、菅楯彦の1942年11月の年譜(画聖菅楯彦名作大成、没五十年展図録ほか)を参照すると、11月10日(火)～15日(日)の6日間、大阪大丸で小品画展が開催されたことは知られているが、これに続いて11月27日(金)～29日(日)の3日間、大阪高島屋美術部で菅楯彦の小品画展が開催されたことを追加できる。上述した展観目録に「浪華画壇の耆宿」とあるように、この「金剛慕情」を制作したとき、菅楯彦は65才に達していた。

また、1942年の年譜によれば11月の展示会に

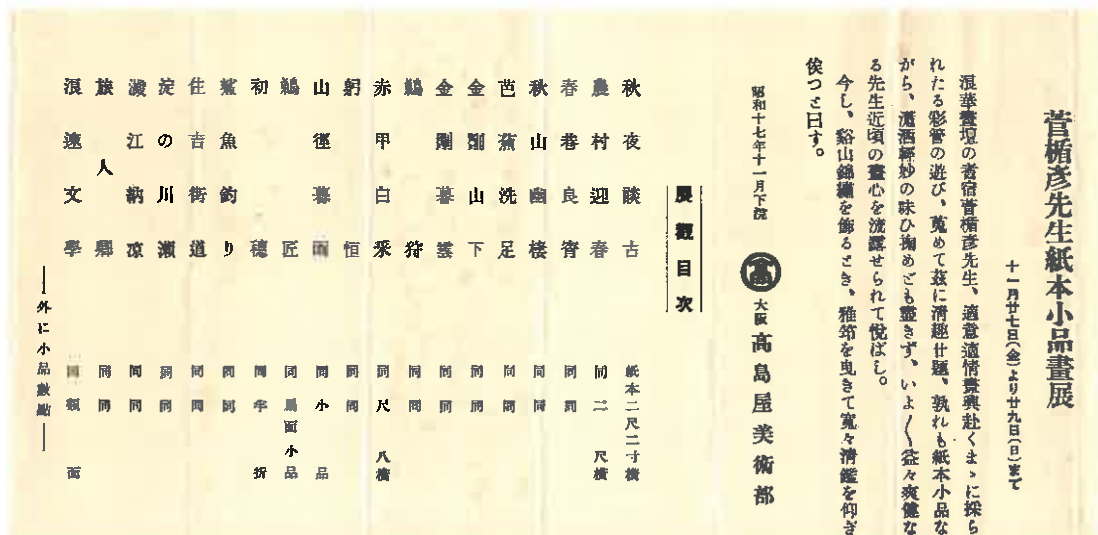


写真4 大阪高島屋で開催された小品画展の目録

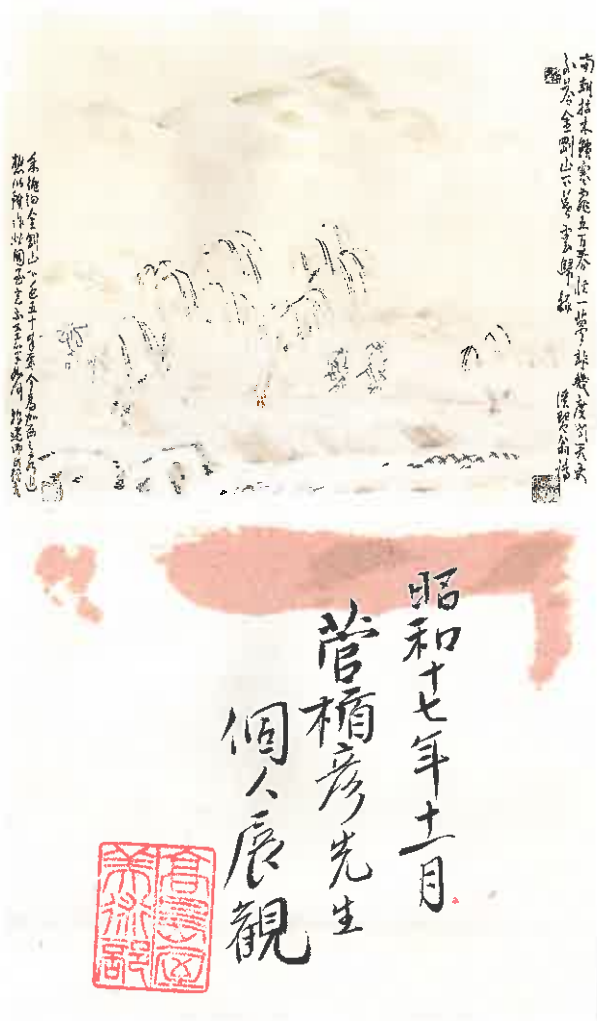


写真5 同封写真(上)とその裏面(下)

先立ち、2月3日(火)～8日(日)に大阪松坂屋で開催された「大阪日本画報国会献納日本画展」と席上揮毫、3月19日(木)～22日(日)に東京三越、同4月22日～28日まで大阪三越で開催された日本画家報国会主催による「日本画家報国会主催 軍用機献納作品展覧会」に参加している。

この時に作成された図録によると、菅楯彦は「社人迎春(迎)春」(作品番号182)を出品している(写真6)。現在、本作品は東京国立近代美術館の所蔵であるが、この経緯は会場を提供した三越が全作品184点を購入し、東京帝室博物館に寄贈したことによる。

ところで、「社人迎春」と「金剛慕情」を比較したとき、その彩色の変化に気づく。「社人迎春」では群青・緑青をはじめ、楯彦が好んだ高価な顔料を用いた鮮やかな着色が施されているが、「金剛慕情」では淡く彩色されるのみである。これが画讃にある楯彦の心情を反映した

本作のみの特徴である可能性について検討しておく、「金剛慕情」と同時に出品されたと推定できる作品に、小品画展目録の5番目に記載された「芭蕉洗足」がある。この作品は落款の共通性や画讃の内容から、楯彦の没後10年、顕彰建碑記念として編纂された図録にある「蕉翁洗足」(菅楯彦名作大成 No.73)と同一作品と推定できる。同図録には白黒写真で掲載されているが、同様の傾向が看取できる。

結果的に、淡彩は「金剛慕情」にのみ特有な描画法ではないと推定できるが、この変化は何に起因するのであろうか。

4. 太平洋戦争下の日本画壇

1942年、「大阪日本画報国会献納日本画展」と「日本画家報国会主催軍用機献納作品展覧会」が開催された2月～3月前後、陸軍はシンガポール・ニューギニア侵攻、海軍はジャワ沖・スラバヤ沖海戦などの第一段階作戦とそれに継起する一連の作戦を発動していた。しかし、大阪高島屋美術部で小品画展が開催された同年11月までには、4月18日のドーリットル隊による東京・名古屋・神戸などの初空襲を契機とした6月のミッドウェー海戦とその後のソロモン沖海戦、南太平洋海戦、あるいはガダルカナル島での攻防戦などが続き、陸海軍とも敗色を深めつつあった。また、同盟国のドイツ第6軍も水陸交通の要衝スターリングラード(現ボルゴグラード)の攻防戦において、ソ連軍の反攻(ウラヌス作戦)により包囲され、第二次世界大戦も大きく戦局の転換期を迎えた。

逼迫した戦局下、画用絹購入に切符制が適用される事態に端を発して1942年3月、日本画製



写真6 軍用機献納作品展覧会図録

作資材統制協会（会長野田九浦）が発足した。これには先立つ1940年7月、商工・農林両省から「奢侈品等製造販売制限規則」（通称七・七禁令）が公布・施行され、工芸作家は蒔絵に金を使用できないなど大きな影響を受けていた。施行当時は適用除外されていた日本画家も、開戦により緑青・群青をはじめとした輸入顔料、さらに木材統制により木枠などの入手が一段と困難になったことが背景にある。藤田嗣治をはじめとした戦争画にみる茶系統の色調も、絵具の欠乏が影響していたのであろう。

このような状況について、太平洋戦争当時を回顧した高島屋美術部の社内座談記録にも、同部を次第に覆う暗雲について、悲壮感が漂っている。1942年には売場面積も縮小され、生産制限や配給制度の導入から、各種資材の入手が困難になり、新作品の制作が不如意になったことや、若年社員の出征も重なり、一時は閉鎖寸前まで追い込まれたことが綴られている。

時を同じくする1942年3月、文展無鑑査や院展・青龍社同人190名から構成される日本画家報国会（会長野田九浦）が設立され、前述した軍用機献納作品展をはじめ、献金・献納運動を展開した。例えば、前述したように軍用機献納作品展覧会の出品作品は一括して三越が買い上げ、売上金20万円は陸海軍恤兵部（献金・寄付による軍需品の購入や戦地慰問団の派遣など兵士に対する福利厚生）へ、10万円ずつ献金された。

なお、日本画家による献納運動としては、先に横山大観が皇紀二千六百（昭和15）年と、自らの画業50年を記念し、「彩管報国」（絵筆を執って国に尽くすこと）を意図した個展がある。大観は陸海軍を意識した「海・山十題」の連作20点を展覧し、その売上金50万円（2万5千円×20点）で陸海軍に各2機計4機の軍用機（陸軍愛国445〔大観〕号・446〔大観〕号、海軍報国383〔大観〕・384〔大観〕号）を献納した。

1940（昭和15）年5月に献納された愛国445〔大観〕号機は97式重爆撃機と推定され、納入価格は1機約25万円であった。第二次世界大戦の開戦前夜、軍需成金の出現による美術品の高騰、特に日本画壇の活況と一部の著名作家とはいえ、作品価格の実情を物語る一例であろう。

その後、1943年5月には発起人280余名を集めて、社団法人日本美術報国会（会長横山大観）

の創立総会が開催され、第一部として日本画（部）会長野田九浦、幹事長山口蓬春、理事安田靱彦、通称美報）がおかれた。また、日本画資材統制協会や美術家連盟、全日本彫刻家連盟、工芸美術作家協会を統合し、社団法人日本美術及工芸統制協会（会長吉野信次、理事長小玉希望、通称美統）も設立された。

美報・美統の本部は共に東京三越内に置かれたが、画材は従前の配給方法から、美統に配給を認められた作家でなければ事実上、入手できない状況を生み出し、美統に所属する一部著名作家による独占化が進んだ。両者は表裏一体の組織として、戦時下美術の総合的統制と振興に貢献することになった。

5. おわりに

以上のように、「金剛慕情」の存在が確認されたことにより、1942（昭和17）年11月27日（金）～29日（日）の3日間、大阪高島屋美術部で菅橋彦の小品画展が開催されたことを、新たにその年譜に追加することができた。あわせて、出品作品のひとつである「金剛慕情」にみる画風の変化から、顔料や画材の供給量や質的転換にみる、戦時下の美術界をめぐる厳しくも、特異な時代相の一端を垣間見ることができた。橋彦（美術界）も1942年の流行語のひとつ、「欲しがりません勝つまでは」の状況に呻吟しつつ、画業に勤しむ姿を髣髴させる。

【主要引用・参考文献】

- 倉吉博物館1997、『浪速の雅人 菅橋彦』倉吉博物館
追内祐司2004、「戦時下における美術制作資材統制団体について」『近代画説』第13号、明治美術学会
菅橋彦顕彰会1973、『画聖 菅橋彦名作大成』そのⅡ図録編、菅橋彦顕彰会
高島屋美術部五十年史編纂委員会1960、『高島屋美術部五十年史』、高島屋本社
鳥取県立博物館2014、『没後五十年 菅橋彦展 浪速の粹 雅人のこころ』、鳥取県立博物館
日本美術院百年史編集委員会1998、『日本美術院百年史』7巻、日本美術院
野田九浦編1942、『日本画家報国会主催 軍用機献納作品展覧会図録』芸艸社
東京文化財研究所「美術界年史（彙報）」
<http://www.tobunken.go.jp/materials/nenshi>
鳥居行博「藤田嗣治と戦争画」
<http://www.geocities.jp/torikai007/war/bunkajin-picture.html>
陸軍愛国号献納機調査報告
<http://www.ne.jp/asahi/aikokuki-top.html>